

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 27 日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520121

研究課題名(和文)「細川護立の近代美術に関わる活動の総合的研究 華族の文化的役割の見地から」

研究課題名(英文) The comprehensive research of the Hosokawa Moritatsu's activities on Japanese modern art from a viewpoint of noble families' cultural part

研究代表者

三上 美和 (MIKAMI, Miwa)

京都造形芸術大学・芸術学部・准教授

研究者番号：90531640

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：細川護立旧蔵の古美術及び近代美術作品リストを作成したところ、護立コレクションが従来言われていたよりも広範囲にわたっていることが判明した。

また護立が支援した近代陶芸家河井寛次郎との関係について検討し、護立と河井の関係について既存の説について事実と違った点が明らかになった(東洋陶磁学会2014年度第2回研究会にて発表)。さらに、護立旧蔵品の中で重要な位置を占める東洋仏教遺物の検討を行い、とりわけ著名な旧宝慶寺石仏の蒐集について、原三溪との関わりを中心に検討した(『京都造形芸術大学紀要 Genesis』第18号掲載)。

研究成果の概要(英文)：I have investigated the antiques and modern art works owned by Hosokawa Moritatsu, and I inquired into how he was involved in the promotion of Japanese modern art. The results of my investigation are as follows. First, his collection covered wider area than one which had been told previously. Next, he also had one side as a business person, and his funds realized his purchase of antiques and modern art works without limitations. Lastly, I examined the actual situation of his Oriental Buddhist relic collection which occupied the most important position in his collection. I also revealed the real truth about relations between Hosokawa and Kawai Kanjiro, a modern potter whom Hosokawa supported. The comprehensive research of the Hosokawa Moritatsu's activity on Japanese modern art from a viewpoint of noble families' cultural parts.

研究分野：日本美術史

キーワード：細川護立 美術蒐集 美術家支援 東洋陶磁蒐集 河井寛次郎 宝慶寺石仏 永青文庫 熊本県立美術館

1. 研究開始当初の背景

細川護立の美術コレクションは細川家代々の美術品と共に護立の設立した永青文庫に最も多く所蔵され、同館及び全国各地の美術館でもたびたび紹介されてきた。護立の活動は重要性が指摘されてはいるものの、具体的な活動については部分的な指摘に留まり、総合的な視点からの検討は未だなされていない。

筆者はこれまで横浜の実業家で近代美術のパトロン、古美術コレクターとして著名な原三溪及び三溪旧蔵作品の検討を行い博士論文としてまとめた。本論では日本近代において社会的地位の高い人々が芸術の創造に大きな影響を与えていることを論じた。本研究もその延長線上にある。

これまでの研究過程で、三溪と交流があり、時に同時代の日本画作品のライバル的コレクターとして引き合いに出される護立の重要性を知るとともに、護立に関する基礎的検討の必要性を痛感した。さらに本研究が東洋陶磁史研究史においても有益な視点を提示できると確信した。

2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では護立が近代美術史において果たした役割について総合的に明らかにし、その意義を説明することを目的とする。

また本研究は、従来未解明かつ重要な課題である華族の日本近代社会に果たした文化的役割について明らかにするものである。華族の中でも特に有力な存在の一人であった護立に関して実証的に解明する本研究は歴史学においても検討の待たれる重要課題である。

護立の活動については、今まで白樺派や近代美術との交流、東洋の古美術蒐集で果たした先駆的役割といった特定のトピックのみ注目されてきた一方、その蒐集の実態は明らかにされておらず、美術蒐集に関する正確なデータの提示もなされないまま、本人や関係者の回顧を中心として語られてきたものがほとんどである。そこで、その活動の詳細を調査し護立の旧蔵作品を正確に把握しデータ化して提示し、今後の研究の基礎とすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は3年間かけて、細川護立の活動の中でも美術に関わるものに着目しその活動の全貌を明らかにして今後の研究の基礎となるデータを作成する。併せてその活動の美術史における意義と当時の文化に与えた影響についても詳細に解明する。

まず、護立の古美術及び近代美術蒐集の全貌を解明し、護立旧蔵美術作品の復元を行う。

平成25年度には前年度のデータにもとづき、護立の古美術蒐集が当時の美術鑑賞、美術史学及び陶磁史学に与えた影響を解明す

る。特に護立が交流した芸術家の中でも特に影響を及ぼした河井寛次郎の初期創作活動との関係を解明する。

4. 研究成果

(1) 護立旧蔵美術品リストの作成

初年度、2年度には、護立旧蔵の古美術及び近代美術作品リストを作成した。調査を通じて、護立コレクションが従来言われていたよりも広範囲にわたっていることが明らかになった。特に従来言われてきた近代美術コレクションの豊富さに加え、現在細川コレクションを代表する近世以前の古美術コレクションも、護立によって明治期以降積極的に購入されている様相も明らかになった。

(2) 近世以前の蒐集についての新知見

明治期の文献を調査したところ、護立の美術作品購入には地元の熊本ゆかりの宮本武蔵の作品が多く含まれていたことがわかった。護立の蒐集に、当時の武蔵再評価が深く関わっていたのである。護立が白隠、仙崖といった近世禅画をいち早く再評価したこととあわせ、注目すべき事実である。

なお、護立所蔵美術品は、大正4年(1915)江戸記念博覧会を嚆矢とし、多くの展覧会に作品が出品され、図録にも作品が掲載された。その後、戦前を通じて開催された古美術の名品展に協力している。これは外部からの要請によるものではあるが、護立ら所蔵者の協力があってこそ開催されたものであることから、護立を美術の普及を外部から支えた一人と捉えることもできる。

(3) 河井寛次郎との関わりについて

これまで作成したリストを補強するとともに、本リストをてがかりに、護立が支援した近代陶芸家河井寛次郎との関係について検討し、護立の購入作品を特定した。その結果、護立と河井の関係について既存の説について事実と違った点が明らかになった。本研究成果は東洋陶磁学会第2回研究会(平成26年10月4日)で発表した。以下に内容を述べる。

河井寛次郎は近代を代表する陶芸家の一人である。河井は初期において東洋陶磁から強く影響を受け陶芸活動を行ったが、その後、制作の方向性に疑問を感じ、煩悶する過程で柳宗悦、濱田庄司、バーナード・リーチらと民芸運動を進めるとともに、中期以降は民芸を創作の糧として制作した。河井の代表作が中期以降数多く作られたことは言うまでもないが、河井自身も語るように、活動の基礎がそれ以前に形成され、その後の活躍を準備したこともまた事実である。この初期の河井の活動が多くくの支援者に支えられたこともよく知られているが、彼らと河井との交流が創作にどう影響を与えたかについてはこれまで明らかにされていない。

そこで、河井の初期作品について島根県立

美術館、京都国立近代美術館、河井寛次郎美術館（京都）で河井の初期作品について調査し、護立との関わりと制作に及ぼした影響について考察した。

各美術館における作品調査からは、河井の初期作品が東洋陶磁のなかでも中国、朝鮮陶磁から多大な影響を受けていたことと同時に、東洋陶磁から影響を受けながらも、デザインには独自の感性を反映させていたことも分かった。

続いて文献調査からは、以下の事実が判明した。

大正10年の河井の第1回個展開催の際、新聞各社や批評家に作品が絶賛された。この時岩崎小彌太、細川護立らが所蔵の東洋陶磁の名品を河井に鑑賞させ、作品も購入して河井の初期活動を支えたと言われる。既に周知のこととされているこれらの出来事について改めて注目し、細川旧蔵の河井作品を調査したところ、細川護立により河井の初期作品は28点所蔵されており、細川が河井の初期作品を相当数購入していたことが確認できた。

しかし、細川が東洋陶磁蒐集に乗り出したのはその数年後のことであり、細川家の蒐集品を河井が見た、と言われている時期、護立はまだ東洋陶磁を入手していなかったことがわかった。発表では、この時河井が見たのは護立コレクションではなく岩崎家の東洋陶磁コレクションであった可能性が高く、時期ももっと前であったと考えられることを指摘した。

さらに、河井が洋書で最新の知識を得つつ、当時の旧家の売り立てや骨董商の所蔵品などから貪欲に学んでいた様相を検討した。中国鑑賞陶磁の本格的な日本での受容は昭和初期以降と言われていることから、河井はそれに先んじて、日本での鑑賞陶磁受容が始まった頃、いち早く反応して制作に生かした陶芸家だったといえる。河合の初期作品については、後期の作品に比べそれほど注目されていないが、今後は鑑賞陶磁の受容とあわせて理解されるべきものであることを確認した。

さらに本発表では、護立より早い時期、河井の修業時代を支援した人物として、山岡千太郎を紹介した。山岡が亡くなるときには、河井が駆けつけ、家族と共に最後を看取ったというほど、両者は親密な関係を生涯続けた。山岡に関しては近年新たな文献が刊行されるなど関心も高まっている。発表では、今回調査で新たに分かった山岡の東京での古美術コレクターとしての評判について提示した。

河井の初期活動にあたり、山岡の尽力は大変大きかったことを改めて確認しておきたいと思います。

(4) 護立旧蔵宝慶寺石仏群について

また、護立旧蔵品の中でも重要な位置を占める東洋仏教遺物の検討を行い、特に著名な旧宝慶寺石仏の蒐集について、原三溪との関

わりを中心に検討した。本研究成果は『京都造形芸術大学紀要 Genesis』（第18号）にまとめた。

本研究では、護立の宝慶寺石仏の所蔵経緯を中心に検討し、国内に所蔵されている石仏は全て護立と原三溪によって購入されていたことを確認した。特に三溪に関してはこれまでほとんど所蔵が知られてこなかった同石仏の入手当時の状況について、当時どう展示されていたかなど、具体的に明らかにした。

護立による同石仏群の所蔵経緯については既に周知のことであるが、正木直彦、関野貞、荻野仲三郎という、文化財保護に深く関わっていた人々について関係資料にもとづき再検討し、その実態を詳細に示した。

特に護立旧蔵品は『世界美術全集』に掲載され、一方、日本における仏教美術研究者により戦前、戦後を通じて研究されている。こうした事実から、三溪、護立は同石仏群の日本における受容において、重要な役割を果たしたと考えられる。

護立と文化財をめぐる人脈については、護立が文化財行政にどのように関わるようになって行き、どう活動したのかについて明らかにすることでいっそう明確になるとと思われる。護立旧蔵品の全容の解明とあわせて検討を進めることを今後の課題とした。

(5) 実業家としての護立像

さらに本研究の過程で判明した新たな情報として、熊本県立美術館、永青文庫と情報交換し、護立の事業の規模の大きさが相当なものであったことを知った。旧華族であると同時に旧藩主として多角的な事業を行っていたことにより、護立は自由な蒐集活動を行えたのである。

(6) まとめと今後の課題

護立旧蔵品について、特に従来余り知られてこなかった近世以前の蒐集について明らかにすることができた。また、河井寛次郎との関係については、河井の初期作品を理解する上でも重要な意味をもつものである。

しかし一方、近代美術のコレクションについては、白樺派との関係も含め、あまり検討することができなかった。護立の優れた近代美術コレクションは広く知られているものの、一歩突っ込んだ研究がなされていないことから、さらなる検証が必要である。護立旧蔵近代美術品は、日本画、洋画を中心としつつ、白樺派の文学者との交流など、近代美術史、文学史の両面からの検討が必要とされる。

また、護立の実業家としての一面についても掘り下げることができなかった。あわせて今後の課題としたい。

本研究は、護立の設立した永青文庫、護立旧蔵品の一部が所蔵、展示されている熊本県立美術館関係各位の多大な御協力を得て進めることができた。しかし護立を総合的に検討するためには、美術史学のみならず、文学、

歴史学などのさらに多方面からの協力の必要を痛感した。今回得られた成果を踏まえ、関係機関と連携しつつ、今後も検討を重ねていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

三上美和『京都造形芸術大学紀要 Genesis』
第18号「原三溪と細川護立の美術蒐集について 宝慶寺石仏群の所蔵をめぐって」
2014年11月、pp.156-165

〔学会発表〕(計1件)

三上美和「河井寛次郎の初期支援者について」東洋陶磁学会第2回研究会、2014年10月4日、於五島美術館(東京・世田谷区)

6. 研究組織

(1)研究代表者

三上美和 (Mikami, Miwa)

京都造形芸術大学・准教授

研究者番号：90591640

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし